

近江商人高井作右衛門家の経営（2）

The Management System of the Takai Family of Omi Merchants（2）

上 村 雅 洋
Uemura, Masahiro

Ⅱ 明治・大正期の経営

1 酒 造

明治期における高井作右衛門家の酒造高を前掲表 2 によって見てみると、明治元年と 2 年は 3 分の 1 造りと 4 分の 1 造りで、それぞれ 273 石余と 188 石余であり、江戸期の 1000 石前後におよぶ酒造高に比べれば落ち込んでいる。その後明治 9 年までは 300 ～ 600 石程度で、やや低迷しているが、明治 10 年以降は 600 ～ 800 石程度の規模を維持し、江戸期に近い酒造高にまで回復している。さらに、明治 33 年には 2080 石、同 40 年には 2047 石 5 斗とあり、どういう理由によるものか不明であるが、例年の倍以上の酒造高を誇っている。

明治初年には、酒造株改めや鑑札の交付がなされ、高井作右衛門家の酒造高などが明確になる。明治 2 年 3 月の「酒造濁酒醤油造御鑑札渡帳」⁽¹⁾には、明治元年 11 月の鑑札の写が記されており、酒造家 22 枚、濁酒造家 11 枚、醤油造家 9 枚の合計 42 枚の鑑札が下げ渡された。そこには、前掲表 3 に見られた慶応元年の新町宿組合のメンバーがほぼ書き上げられており、酒造では、上野国緑埜郡金井村の百姓与右衛門（酒造古株、米高 300 石）と同国同郡三本木村の名主幸七（酒造古株、米高 200 石）が追加されている。上野国緑埜郡藤岡町の作右衛門は、「酒造古株、元米掛米糶共、米高八百石、内三百石増石」とあり、これらの酒造家の中では最高の米高となっている。

（1）明治 2 年 3 月「酒造濁酒醤油造御鑑札渡帳」。

明治元年12月の「新町宿組合酒造濁酒醤油造入用帳」⁽²⁾では、十一屋作右衛門（酒造高800石）、十一屋惣兵衛（同800石）、松本武兵衛（同550石）、藤木戸重太郎（濁酒造高10石）、堤村吉右衛門（同10石）、日野屋惣右衛門（酒造高400石）、岩井屋新太郎（同400石）、大戸甚右衛門（同300石）、田嶋政右衛門（同300石）、桜井千代之助（同300石）、和泉屋与右衛門（酒造高300石、醤油造100石）、近江屋平八（酒造高200石）、和泉屋新兵衛（同200石）、近江屋四郎左衛門（醤油造200石）、三本木幸七（酒造高200石）、鬼石権左衛門（同200石）、高田彦左衛門（酒造高200石、醤油造50石）、中島村文右衛門（同200石、同50石）、升屋惣兵衛（酒造高150石）、高橋源七（醤油造150石、濁酒高10石）、原三左衛門（濁酒高10石）、田口六左衛門（酒造高100石）、新町武兵衛（同100石）、立石瀬兵衛（同100石）、加藤金之助（醤油造高100石）、折茂健吾（同50石）、田口六兵衛（醤油造高50石、濁酒造10石）、新町太助（濁酒造20石）、新町國藏（同10石）、新町清兵衛（同10石）、白石兵松（同10石）、鬼石忠藏（同10石）、中島村市左衛門（同10石）の惣石高6770石であった。彼らの中には、酒造業と醤油業とを兼営するものも見られた。

明治3年の「酒造濁酒造醤油造当午年御冥加上納帳」⁽³⁾においても、酒造家については表6のように23軒があげられている。このうち、19軒が慶応元年の酒造家と同じであり、さほど大きく変わることはなかった。最大の酒造高も高井作右衛門家の作四郎と鬼石村の新太郎のそれぞれ800石であり、酒造高も同じであった。

2 雇 用

明治以降の高井家の雇用者に関しては、まず酒造労働者が明らかになる。明治10年の「従業員雇入依頼書」⁽⁴⁾によって、明治10～13年に高井家の藤岡店

(2) 明治元年12月「新町宿組合酒造濁酒醤油造入用帳」。

(3) 明治3年「酒造濁酒造醤油造当午年御冥加上納帳」。ほかに、濁酒造家24軒、醤油醸造家9軒が記されており、濁酒醸造家の増加が著しい。

(4) 明治10年「従業員雇入依頼書」。この史料は、前掲『藤岡市史』資料編 近代・現代 626～628頁にも掲載されているが、一部異なる。

表 6 明治 3 年新町宿組合酒造冥加上納額

酒造高	冥加金	住 所	身 分	名 前
100 石	5 両	上野国緑埜郡新町宿之内笛木新町	年寄	嘉六郎
150 石	7 両 2 分	上野国緑埜郡新町之内落合新町	百姓代	惣平
100 石	5 両	同町	百姓	武平
800 石	40 両	同国同郡藤岡町	百姓	作四郎
400 石	20 両	同町	同	新太郎
300 石	15 両	上野国緑埜郡藤岡町	年寄	甚太郎
200 石	10 両	同町	百姓	新太
200 石	10 両	同町	同	平太
300 石	15 両	同国同郡神田村	名主	金七
200 石	10 両	上野国緑埜郡神田村	名主	彦六
450 石	22 両 2 分	武蔵国賀美郡藤木戸村	名主	庄八
200 石	10 両	同村	百姓	房次郎
200 石	10 両	上野国緑埜郡郡本動堂村	同	勇藏
150 石	7 両 2 分	上野国緑埜郡上落合村	百姓	孫藏
800 石	40 両	同国同郡鬼石村	名主	新太郎
300 石	15 両	同村	名主	千代作
200 石	10 両	同村	与頭	権平
400 石	20 両	上野国緑埜郡鬼石村	百姓	惣次郎
100 石	5 両	同国同郡立石新田	百姓代	瀬平
200 石	10 両	同国同郡三本木村	名主	幸七
200 石	10 両	同国同郡中島村	名主	文兵衛
300 石	15 両	上野国緑埜郡金井村		与八郎
100 石	5 両	武蔵国賀美郡琵琶土村		彦八

(注) 明治 3 年「酒造濁酒醬油造当午年御冥加上納帳」(高井作右衛門家文書)より作成。

で雇用されたと思われる酒造稼・醬油製造稼の人々を示したのが、表 7 である。石川県の陰浦六三郎の明治 12 年と 13 年の分を除けば、同一人物のものはなく、43 人分の藤岡の高井作右衛門家での酒造稼・醬油製造稼を理由とする藤岡町の戸長宛の寄留依頼書が綴じられている。⁽⁵⁾ 明治 10 年分は 3 通、同 11 年分も 3 通、同 12 年分は 12 通、同 13 年分は 26 通の合計 44 通である。稼ぎの内容は、ほとんどが酒造稼のための雇入れであって、明治 12 年には 10 月 8 日に 3 人が、12 月 9 日に 4 人が、同 13 年には 11 月 29 日に 18 人が冬場の酒造期間に合わせるように集中して雇用されている。出身は、ほとんどが新潟県(越後国)であり、ほかに石川県(越中国)の者も 6 人見られるが、藤岡店の酒造業は越後の杜氏集団によって担われていたことがわかる。年齢は、ほとんどが 20～30 代の働き盛りの蔵人であったが、彼らに交じって大図栄七(58 歳)、小山善七(48 歳)、

(5) 本来 1 枚ずつばらばらの寄留依頼書であったものを一つに綴じ込んでおり、年代も順不同であったが、表 7 では年代順に並べ替えた。

本間啓之助（40歳）、曾田八十吉（40歳）などの年配者もあり、彼らはたぶん杜氏や頭などの酒造作業での指導的役割を担っていたものと思われる。

これらの酒造労働者とは別に、「醤油製造稼雇入」として明治11～13年にそれぞれ1～3人ずつ雇用されており、その出身は千葉県2人、茨城県1人、

表7 酒造稼等雇入者

年 月	稼 ぎ	住所	住 所	続柄	名 前	年齢(歳)
明治10年12月9日	酒造稼雇入	石川県	越中国新川郡高畑村	長男	大森由治郎	23
明治10年12月10日	醸造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡棒金村	長男	橋立宇太郎	28
明治10年12月20日	醸造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡藤野村	三男	渡辺与惣吉	24
明治11年9月22日	酒造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡下宿村		中山三之助	29
明治11年10月1日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡直海浜村		吉崎幸七	33
明治11年12月12日	醤油製造稼雇入	千葉県	下総国香取郡須賀山村	長男	佐久間文蔵	28
明治12年4月8日	酒造稼雇入	石川県	越中国砺波郡烏倉村	長男	陰浦六三郎	23
明治12年4月8日	酒造稼雇入	石川県	越中国砺波郡烏倉村	長男	中川鉄蔵	20
明治12年6月9日	醤油製造稼雇入	千葉県	下総国香取郡嶋山村	二男	木内祐治郎	26
明治12年9月2日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡榎井村		上野与作	20
明治12年9月2日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡直海浜村	四男	吉崎留吉	22
明治12年10月8日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡三ツ屋浜村	五男	小関佐太郎	22
明治12年10月8日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡三ツ屋浜村	長男	滝澤兵造	25
明治12年10月8日	酒造稼雇入	新潟県	越後国頸城郡直海浜村		小山善七	48
明治12年12月9日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡上猪子田村	二男	永井米太郎	20
明治12年12月9日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡上猪子田村	二男	永井源蔵	17
明治12年12月9日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡上猪子田村	長男	坂口兵造	23
明治12年12月9日	酒造稼雇入	新潟県	越後国中頸城郡上輪村	長男	近藤作蔵	17
明治13年4月9日	醸造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡長崎村	三男	本間啓之助	40
明治13年4月9日	酒造稼雇入	石川県	越中国新川郡古山新村	二男	前田松蔵	35
明治13年6月25日	醤油製造稼雇入	茨城県	常陸国筑波郡吉沼村		串田常松	31
明治13年6月25日	酒造稼雇入	石川県	越中国砺波郡烏倉村	長男	陰浦六三郎	24
明治13年6月28日	醸造稼雇入	千葉県	海上郡銚子今宮町	長男	石原源助	21
明治13年10月22日	醤油製造稼雇入	宮城県	陸前国宮城郡仙台肴町	五男	菊池安治郎	26
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡清水谷村		曾田八十吉	40
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡清水谷村	長男	大図忠造	26
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡清水谷村	二男	大図栄七	58
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国刈羽郡清水谷村		大図峯吉	17
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡棚広村	長男	羽深忠作	24
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡飯村	長男	岡孫八	21
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡細野村		山賀伝吉	24
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡松代村	弟	斎木留蔵	18
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡松代村	長男	関福治郎	18
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡五十五平村	長男	志賀米松	19
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡五十五平村	二男	室橋榮造	37
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国東頸城郡上猪子田村		永井安治郎	21
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国中頸城郡飯村		市川源吉	23
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国中頸城郡東谷内村	弟	曾田熊吉	23
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国西頸城郡平谷村	長男	渡辺勘治郎	25
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国古志郡富嶋村	長男	市野弥之七	21
明治13年11月29日	酒造稼雇入	新潟県	越後国古志郡漆山村	二男	坂田鉄造	21
明治13年11月29日	酒造稼雇入	石川県	越中国下新川郡金山村	長男	住吉菊之助	27
明治13年12月1日	酒造稼雇入	新潟県	越後国南蒲原郡手抱野新田	二男	佐藤重太郎	20
明治13年12月10日	醤油製造稼	兵庫県	播磨国赤穂郡赤穂飯屋田町	二男	清原正蔵	27

(注) 明治10年「従業員雇入依頼書」（高井作右衛門家文書）より作成。

兵庫県 1 人、宮城県 1 人であり、酒造労働者とは異なっていた。また、明治 13 年 6 月の石原源助も「醸造稼雇人」とあるが、出身は千葉県の銚子であり、醤油製造稼のために雇入れたものと思われる。醤油醸造は、「明治四年辛未ヨリ開業、一醤油造、附帶味噌、酢」⁽⁶⁾とあるように、明治 4 年から藤岡店で始められていた。

前述したように慶応元年には、伊勢国津の余慶町に津店を開店した。この店は、慶応元年 5 月に津藩の藩主藤堂家の酒造蔵を 1000 両で譲り受け、内部を改装して同年 11 月から酒造業を始め、同 4 年 2 月には醤油製造も行うようになった。⁽⁷⁾津店は、明治元年に入江町支店を開設し、同 2 年には醤油醸造も開始した。さらに、明治 19 年には津の常盤町支店を開き、3 店となった。明治 21 年 1 月の津 3 店の在勤人員は 65 人であり、ほとんどが近江出身者であった。明治 4 年の清酒造石高は 500 石であったが、同 27 年には 1586 石余となり、醤油の醸造高も明治 4 年には 55 石であったが、同 27 年には 846 石余になったという。⁽⁸⁾

ここでは、明治 38 年 1 月の「現在人表 津店」⁽⁹⁾によって、津店の従業員を見てみよう。表 8 によれば、本店・常盤町支店・入江町支店の 3 店の状況が明らかになる。津の本店に 10 人、常盤町支店に 8 人、入江町支店に 4 人の合計 22 人の店員がいた。他に酒造杜氏・蔵人 18 人、醤油杜氏・蔵人 11 人、「精米方及炊事場」に 5 人の従業員がおり、合計 56 人の人員が在籍していた。店員

(6) 前掲文化 4 年「店法」。

(7) 津店を開くにあたっては、蒲生郡北脇村出身の日野商人である森本仙右衛門の尽力があったという(『津市史』第 4 巻、津市役所、1965 年、685～687 頁)。

(8) 津店の状況については、前掲島武史『高井作右衛門年代記』132～137 頁に詳しい。明治後期の高井酒造場の使用人は 30 人、大正 13 年の「津市案内記」には高井醸造場として清酒・味噌・醤油の製造を行い、職工数は 47 人、生産額は 24 万 6000 円とある(前掲『津市史』第 4 巻、583、588 頁)。また、明治 30 年には蒸気原動力を新設し、同 32 年には 10 馬力原動機を原料米の精白などに利用して醸造の改善を図り、銘酒「神府」が広まったという(同、684～685 頁)。

(9) 明治 38 年 1 月「現在人表 津店」。

表 8 明治 38 年津店人員

項 目	原 籍	姓 名	生 年 月	年 齢 (歳)
本店	蒲生郡日野町大字河原	桜井丸一	安政 6 年 2 月	47
本店	甲賀郡寺庄村大字寺庄	藤井正吉	明治 2 年 2 月	37
本店	蒲生郡桜川村大字上小路	梶村喜代松	明治 8 年 2 月	31
本店	蒲生郡日野町大字松尾	川嶋百藏	明治 4 年 3 月	35
本店	蒲生郡北比都佐村大字増田	安井安治郎	明治 8 年 8 月	31
本店	甲賀郡龍池村大字池田	山本亀吉	明治 11 年 3 月	28
本店	蒲生郡日野町大字松尾	高井嘉七	明治 15 年 11 月	24
本店	蒲生郡北比都佐村大字増田	山中弥惣次	明治 16 年 8 月	23
本店	甲賀郡水口町大字水口	片山庄治郎	明治 22 年 6 月	17
出征中	蒲生郡日野町大字木津	岡与三郎	明治 10 年 11 月	29
常盤支店	甲賀郡龍池村大字池田	田中金兵衛	弘化 4 年 8 月	59
常盤支店	甲賀郡水口町大字水口	片山徳太郎	明治 12 年 10 月	27
常盤支店	蒲生郡北比都佐村大字増田	野口惣吉	明治 14 年 3 月	25
常盤支店	甲賀郡龍池村大字池田	豊田金十良	明治 17 年 11 月	22
常盤支店	甲賀郡寺庄村大字寺庄	重田兼吉	明治 21 年 1 月	18
常盤支店	蒲生郡日野町大字松尾	市田鉄造	明治 25 年 7 月	14
常盤支店	蒲生郡西大路村大字西大路	吉嶋孝治郎	明治 23 年 3 月	15
常盤支店	蒲生郡北比都佐村大字増田	坪倉末吉	明治 24 年 8 月	16
入江町支店	蒲生郡日野町大字松尾	石岡忠吉	慶応 2 年 2 月	40
入江町支店	蒲生郡日野町大字松尾	中田伝吉	明治 6 年 2 月	23
入江町支店	蒲生郡桜川村大字下小路	徳田市太郎	明治 23 年 7 月	16
入江町支店	蒲生郡北比都佐村大字石原	川西作治郎	明治 23 年 11 月	16
酒造杜氏	知多郡東阿久比村大字宮津	新美柳右衛門 (外 17 人)	嘉永元年 3 月	58
醤油杜氏	津市大字栄町	杉山忠治郎 (外 10 人)	安政 4 年 7 月	49
精米方及炊事場合計		(5 人)		

(注) 明治 38 年 1 月「現在人表 津店」(高井作右衛門家文書)より作成。

の原籍は、蒲生郡 15 人、甲賀郡 7 人であり、すべて近江出身者であった。酒造杜氏は愛知県知多郡出身で、醤油杜氏は津市の出身であった。年齢を見ると、最も若いのは 14 歳で、10 代が 7 人、20 代が 8 人、30 代が 4 人、40 代が 2 人、50 代が 1 人であった。本店の筆頭は 47 歳の桜井丸一であり、常盤町支店の筆頭は 57 歳の田中金兵衛、入江町支店の筆頭は 40 歳の石岡忠吉であり、彼らは責任のある地位に就いていたようである。酒造杜氏の新美柳右衛門は 57 歳、醤油杜氏の杉山忠治郎は 49 歳であった。このように、明治以降も津店において近江出身者の雇用が引き続きなされていたことがわかる。

高井作右衛門家の藤岡店については、大正 11 年 6 月 15 日に「国元ニ於テ死亡」した西川恒吉、昭和 18 年 7 月 16 日に「退身」した辻忠吉、昭和 21 年 4 月 2 日に「退身」した福本庄蔵、昭和 25 年 6 月に「退身」した渡辺音次郎、昭和

30 年 10 月 24 日「国元ニ於テ」病死した寺田安太郎が歴代の支配人として活躍した。⁽¹⁰⁾ここでも、江戸時代以来の近江出身者の雇用が続けられて、支配人にまで登り詰めていたことがわかる。

前述した文化 4 年 8 月の「店法」⁽¹¹⁾には、明治 10 年の「店人雑則」が掲載されており、以下のような雇用に関するようすが明らかになる。藤岡店に雇用されるようになると、正副 2 通の「誓約」が提出されたようである。「誓約」には、「御出店へ出稼ギ」「当務勉励ハ勿論」「御家御成規ノ儀、都テ違悖仕ル間敷ク候事」とあり、出店での高井家の家法の順守を求め、保証人も連署するようになっている。「幼年之者」については、「御家法之給料、成年之上可被下候」とあり、成年になって初めて正規の給料が支給されたようである。さらに、「店人之給金之儀ハ、毎年一月中其ノ人年月ノ精勤、惰勉、不勉ヲ差別シ、其年ノ定額ヲ相定メ候事」とあり、給金は毎年 1 月に奉公人の勤務態度により定められていた。

在所登り制度についても規定があり、13 歳で藤岡へ初下向（初下り）すると、5 年後の 17 歳で初帰国（初登り）し、「道中往キ帰り道六十日休暇」と道中を含め 60 日の休暇を得る。20 歳には二帰国（二度登り、休暇日数は初帰国に同じ）、22 歳には三帰国（三度登り、休暇日数同前）、24 歳には四帰国（四度登り、同）、26 歳には五帰国（五度登り、「道中往帰り道七十五日休暇」）、28 歳には六帰国（六度登り、同）、30 歳には七帰国（七度登り、同）、31 歳以上には毎年帰国が許され、休暇は 70 日となった。41 歳以上になると、休暇は 90 日であった。また「非常之事故」で帰国する場合は特別の許可を受けることとなり、旅費はもちろん自弁であった。

通常の旅費は、帰国の時に片道を店から、下向分は本家から支給された。31 歳以下の者は 3 円、日当金 25 銭（中山道 12 日）、31 歳以上の者は 3 円 60 銭、日当金 30 銭（同）であった。幼年から勤続の者には、初帰国の時に祝儀として 5 円が国元で支給され、ほかに袷 1 枚、羽織 1 枚、帯 1 筋、足仕度が与えられた。

(10) 前掲文政 8 年正月「記録之写（二）」。

(11) 前掲文化 4 年 8 月「店法」。

初帰国をすることにより一人前の成年と見なされたようである。

明治15年1月には、この「店人雑則」が改正され、「十二年以下ニテ初出勤ノ者ハ、都テ十六年ニテ初帰国、十三年以上ヨリ十五年迄ニ初帰国候者ハ、定例ノ通り五ヶ年目ニ初帰国、十六年以上ハ中勤者ト見做モノトス」とか、「三十一年未満ニテスデニ一家ヲ為シ、毎年本人帰国スルニアラザレバ、実際差支ヘ向ハ毎年帰国ヲ許ス、尤旅費ハ定例帰国ノ外自費タルベシ」というようなこれまでの慣例にない奉公人のケースを想定した規約も作成されている。また、「在国滞留定例ヨリ長ズレバ、給金日数ニ分割シテ相減ズルモノトス」というような細かな規定も追加されている。高井家が江州日野商人組合に加盟したため、明治20年の初帰国における誓約の規定では、「江州日野商人組合規約ニ拠リ誓約ヲ徴スルモノトス」という文言になっていた。

大正2年の「改正店法」では、在所登り制度について、14歳で初出勤した場合には、4年後の18歳で初帰国（休暇日数50日）、21歳で二帰国（同）、23歳で三帰国（同）、24歳で四帰国（同）、26歳で毎年帰国（休暇日数60日）、31歳より「毎年兩回ニ帰国」（「休暇日数ベテ」70日）、41歳まで「毎年兩回帰国」（「休暇日数ベテ」80日）となった。これまでの帰国の間隔が短くなり、毎年帰国や年に2回帰国というように登り制度がしだいに休暇制度に緩められてきている。

店人（店員）の給金については、「毎年一月支配人ノ具状ニ付キ、家長之レヲ査別シ、其年ノ定額ヲ相定メ、是レヲ通帳ニ記載シ、本人ヘ相渡スモノトス、但シ初帰国ノ年ヨリ相渡スモノトス」とあり、毎年1月に査定され、通帳に記して、初帰国の年から支給された。

大正10年の改正では、はじめて「初出勤者ニハ、初帰国ノ前年迄」手当が支給されるようになった。初出勤の1年目は従来通り支給されなかったが、2年目には15円、3年目には20円、4年目には25円が支給されるようになり、これまでのように初帰国して初めて給金が支給されるという状態はなくなっ

(12) 高井作右衛門は、明治18年12月に設立された江州日野商人組合の頭取に就任している。前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態（2）」83頁。

た。さらに、大正 12 年には、その額が引き上げられ、2 年目には 25 円、3 年目には 35 円、4 年目には 50 円が支給されるようになり、店人の待遇は改善された。昭和 2 年の改正では、14 歳で初出勤した場合には、3 年後の 17 歳で初帰国、19 歳で二帰国、21 歳で三帰国、23 歳で四帰国、25 歳で五帰国となり、初帰国までの期間が 3 年とさらに短縮された。

「昭和十五年追則」では、「店人退身積立金」「病気静養」「有功退身手当金」「退身手当金」などの詳細な規定が定められていった。

3 事業内容と利益構成

高井作右衛門家の藤岡店の事業内容については、前述した「店法」によってある程度明らかになる。明治 10 年の「諸帳場ノ雜則」によれば、「店卸定日」として、元方 1 月 10 日、質方 1 月 5 日、荒物方 1 月 7 日、酒方 4 月 30 日・10 月 31 日とあり、藤岡店（本店）の本部である元方以外に営業部門である質方、荒物方、酒方が存在することがわかる。藤岡店の元方から貸渡される資本金は、質方は 1 日 2 厘日歩（1 か月元金 100 円に付き利金 1 円の割合）、酒方・荒物方は 1 日 3 厘日歩（1 か月元金 100 円に付き利子 1 円 50 銭の割合）の利子をとることになっていた。酒方資本金は、その年の米穀価格の高低によって変動して決めかねるので、一同で協議した上で醸造高を取り決め、定めることになっていた。荒物方の資本金は、5000 円であった。また、藤岡店の元方の資本金は 1 年に 100 分の 5 の利子として、それを本家の賄金にしていた。純益は 3 分割され、10 分の 2 は褒賞金、10 分の 3 は準備金、10 分の 5 は「資本金二加ス」とした。褒賞金は、「店人へ分賦授与致スベキ事」とし、準備金は、「本家へ借用致候事」とある。すなわち、高井家でも、近江商人などで見られた三ツ割制度⁽¹³⁾とされる内部留保、本家への上納、店人への配当という利益処分が行われていた。

明治 12 年の改正では、元方から酒方・荒物方へ貸渡される資本金は、1 日 4

(13) 三ツ割制度については、「三ツ割」制度の史的考察（宮本又次編『上方の研究』第 3 巻、清文堂出版、1975 年）に詳しい。

厘日歩（1か月元金100円に付き利子2円の割合）に、元方資本金の利子は、1か年に100分の8に改められた。

明治15年1月の「改正店法」では、藤岡店の営業内容は4つに分かれ、それを3課で分担することにした。すなわち、「一清酒、銘酒、焼酎、醸造附帯、酒類、請売」「一醤油、味噌、製造附帯、醤油、味噌、塩、請売」、この2つが両造課の担当であり、「一質屋、営業」、これが典物課の担当であった。さらに、「一雑貨、請売附帯、諸売葉請売業」として、「紙類、油類、ローソク類、畳表類、蓆類、麻、水引、元結、扇子、刷毛、筆、墨、白墨、石板、算盤、軸、真田紐、傘類、麻裏、草履、ランプ、線香、ツケギ、火打石、火打金、火口、ラオ竹、石鹼、針、砥石、竹縄、素麺、ベニガラ、塗壁用諸品」を扱っており、これを雑品課が担当するようになった。そして、元方から各課への受渡金の利子歩合は、両造課と雑品課が4厘日賦、典物課が2厘日賦であった。

大正2年の「改正店法」では、両造課は不変であったが、典物課は「一質屋営業、外度量衡及全上修覆及帳簿請売」と事業内容が少し増えた。雑品課は、紙類・油類・ローソク類・麺類・砂糖類の請売りと「塩元売捌」「石油代理販売」となっている。また、元方から各課への売渡金の利子歩合は、両造課と雑品課が日歩10銭、典物課が日歩5銭となった。そして、この店則に対し、「改正増減ヲ要スル時ハ、家長其ノ事由ヲ言明シ、支配人等ノ意見ヲ問ヒ、然ル後之ヲ裁定スルハ家長ノ権内ニアルモノトス」と第33条で定め、家長の権限を再確認している。

大正6年2月には、「四項ヲ三項ニ、三課ヲ二課トス」として、質屋営業を廃止して典物課も廃止した。ただ、「外度量衡及全上修覆及帳簿請売トアルヲ雑品課二併合ス」とあり、典物課に含まれていた度量衡などの事業は雑品課へ移行したが、これも「大正七年十一月十六日廃業ス」とあるように消滅した。さらに、両造課・典物課への利子歩合も大正4年には日歩8銭に、同5年には10銭に、同12年には3銭に変更されていった。

次に、前述した弘化3年の「勘定帳」によって、明治元年から大正12年ま

での藤岡店の利益構成を表9によって見てみよう。江戸時代の利益構成は、「証文」「質方」「酒方」の3部門からなり、特に「証文」のウエイトが高く、「酒方」は最も少ないことがすでに明らかになった。しかし、明治期以降になると利益構成項目が年度によって少しずつ異なるようになる。すなわち、明治3年までは江戸時代と同じように3部門で同じような傾向を保っているが、明治4年から荒物方が見られるようになり、明治5年になると高崎店分と小泉店分が現れる。また、明治6年からは円勘定となる。

まず、「証文」では、明治4年には1300両余と、旧来の貸付金の利子分が従来通り利益として計上されているが、同5年以降激減する。そして、明治10年の377円余を最後に「証文」の項目がなくなり、以降は「外 \times 高」「諸方 \times 高」として一括されるようになる。明治11年からは「外方 \times 高」、明治23年からは「諸方分」「諸方 \times 高」「諸方 \times 」が登場し、これらの金額は明治11年には164円余、同23年には522円余、同35年には5851円余としだいに増加して行く。ただし、大正2年以降は2000～4000円程度にとどまる。明治36～38年には「預り \times 」258円余～474円余が計上されている。大正2年からは「銀行 \times 」が現れ、銀行預金の利子分が計上されるようになる。「銀行 \times 」は、1078円余～4786円余の利益額となっている。この表では省略したが、単発的には、明治6年には旧藩債分と思われる296円余と166円余が記載されている。

「質方」は、明治元年には740両余も利益を獲得していたが、明治3～8年には、200両（円）以下にまで落ち込む。その後はゆっくと増加し、明治27年には1000円台、同29年には2000円台、同34年には3000円台、同36年には4000円台にまで増加するが、同37年以降は1000円以下の利益しか得られず、大正5年には40円余という水準にまで落ち込み、同6年以降は廃止されたため記述が得られない。前述したように、質方も明治15年の改正店法では、「一質屋営業、右典物課トス」とあり、典物課に組織変更され、大正2年には「外度量衡及全上修覆及帳簿請売」の業務が付加された。しかし、こうした利益の減少傾向が大正6年2月の典物課の廃止につながったものと思われる。

表 9 高井作右衛門家藤岡店の利益構成（2）

年 代	証文・諸方 ^ㄞ 等	銀行 ^ㄞ	質方・典物方	酒方・両造方	荒物方・雑品方
明治元年	632両3分3朱・288文		740両3分2朱・653文	262両3分・764文	
明治2年	1005両2分3朱・1貫580文		324両1分2朱・	347両1朱・216文	
明治3年	1350両2朱・3貫216文		171両1分	552両2朱・416文	
明治4年	1300両1分2朱・5貫280文		105両・708文	445両3分2朱・1貫268文	245両
明治5年	255両3分・18貫360文		49両・9貫750文	265両2朱・2貫84文	813両
明治6年	27円22銭2厘7毛			397円33銭3厘3毛	1070円50銭
明治7年	136円51銭4厘5毛			644円79銭1分6毛	697円47銭9厘
明治8年			46円68銭3分3厘	603円58銭3厘	389円58銭3厘3毛
明治9年	166円34銭6厘9毛		62円50銭	1174円51銭5厘	997円36銭1厘
明治10年	377円57銭1厘6毛		446円86銭3分8毛	1283円84銭5厘	1057円61銭5厘
明治11年	164円30銭		529円6銭4厘7毛	1348円7銭5厘	1522円88銭4厘
明治12年	760円36銭7厘2毛		652円81銭2厘8毛	1725円74銭9厘5毛	1936円80銭
明治13年	548円2銭2厘2毛		701円35銭7厘	2650円62銭6厘	2315円48銭8厘
明治14年	784円62銭3厘3毛		613円84銭5厘	528円12銭6厘	2127円59銭7厘
明治15年	523円9銭2厘		746円57銭4厘	4275円73銭1厘	2561円3厘
明治16年	896円24銭7厘5毛		988円81銭8厘	5200円86銭5厘	2254円44銭3厘
明治17年	681円74銭6厘		829円16銭9厘	5578円36銭9厘	1503円38銭7厘
明治18年	814円90銭6厘5毛		743円19銭6厘	2997円76銭4厘	1633円90銭
明治19年	562円29銭8厘		551円90銭4厘	2465円96銭	1536円66銭3厘
明治20年	536円16銭3厘		367円19銭7厘	3199円38銭7厘	1858円16銭7厘4毛
明治21年	743円50銭7厘		438円17銭1厘	2194円7銭2厘	1684円2銭8厘
明治22年	974円9銭3厘1毛		596円52銭8厘5毛	1491円56銭2厘6毛	1849円74銭2厘
明治23年	522円90銭2厘		596円52銭8厘5毛	1938円89銭3厘	
明治24年	799円19銭9厘		739円53銭5厘	2661円69銭3厘	1731円37銭1厘
明治25年	874円91銭3厘5毛		935円2銭	2580円54銭8厘	2026円45銭8厘
明治26年	1038円89銭3厘3毛		776円16銭5厘	2789円65銭1厘	2131円9銭8厘
明治27年	1321円67銭7厘5毛		991円52銭2厘	2871円68銭1厘	2532円13銭3厘
明治28年	1318円98銭1厘		1035円52銭	2862円9銭3厘	3123円30銭7厘
明治29年	1524円73銭9厘		1467円15銭	3023円1銭5厘	3278円90銭5厘
明治30年	2786円16銭1厘		2045円77銭1厘	2743円95銭1厘	4014円97銭9厘
明治31年	3112円75銭5厘		1915円89銭	2545円16銭8厘	1209円19銭9厘
明治32年	3197円58銭9厘		1950円18銭3厘	3146円71銭5厘	4353円61銭4厘
明治33年	3313円6銭8厘		2263円89銭1厘	4305円38銭9厘	4815円28銭4厘
明治34年	5332円42銭4厘		2318円3分4厘	3077円50銭8厘	5399円38銭1厘
明治35年	5851円81銭6厘		3474円58銭7厘	2089円1厘	5191円14銭8厘
明治36年	258円79銭5厘		3826円75銭8厘	3080円38銭1厘	4834円86銭6厘
明治37年	389円2銭		4082円28銭3厘	4278円58銭	4994円59銭2厘
明治38年	474円38銭		722円46銭4厘	4256円4分3厘	5223円17銭9厘
明治39年			528円51銭8厘	5137円73銭5厘	5167円16銭9厘
明治40年			366円35銭7厘	2621円90銭	5142円82銭1厘
明治41年			278円27銭8厘	2685円10銭5厘	5449円98銭7厘
明治42年			564円87銭	4587円85銭3厘	6928円24銭
明治43年			539円96銭3厘	4451円22銭	6780円94銭
明治44年			319円46銭	5350円60銭	4104円58銭
明治45年			204円6銭	6393円90銭	2760円36銭
大正2年	1886円90銭3厘	1078円72銭	235円86銭9厘	9782円15銭	3873円14銭
大正3年	1780円54銭4厘	1217円38銭	210円80銭6厘	16420円50銭	77円30銭
大正4年	2289円74銭9厘	1286円8銭	137円94銭2厘	18086円83銭5厘	1407円82銭5厘
大正5年	1975円86銭3厘	1585円19銭	117円41銭	9862円89銭	982円65銭
大正6年	1598円72銭5厘	2192円32銭	40円47銭	7077円28銭	1661円28銭
大正7年	1824円93銭1厘	1779円3銭		9656円13銭	1169円46銭
大正8年	3941円12銭5厘	2965円89銭		12941円1銭	3288円64銭
大正9年	1677円84銭3厘	2439円28銭		18413円10銭	2214円52銭
大正10年	2036円63銭	4786円96銭		13903円65銭	10089円35銭
大正11年	4597円83銭	2515円30銭		7395円25銭	△424円55銭
大正12年	2547円64銭5厘	3057円57銭		3999円28銭7厘	7140円56銭
					3180円28銭5厘

(注) △は損失を示す。

弘化3年「勘定帳」（高井作右衛門家文書）より作成。

高 崎 店	小 泉 店	〆 (合計)	出 〆	差 引
		1636 両 2 分 3 朱・485 文		
		1665 両 1 分・1 貫 800 文	16 両 2 分	1648 両 3 分・1 貫 800 文
		2073 両 2 分・3 貫 632 文	20 両 2 分	2053 両・3 貫 632 文
		2096 両 1 分・7 貫 256 文	20 両 3 分	2075 両 2 分・7 貫 256 文
443 両 233 文	448 両 2 分 2 朱・370 文	2274 両 2 分・27 貫 800 文	22 両 3 分	2251 両 3 分・27 貫 800 文
397 円 82 銭 5 厘	293 円 50 銭 5 厘	2649 円 48 銭 2 厘 8 毛	331 円 15 銭 8 厘 3 毛	2318 円 32 銭 4 厘 5 毛
851 円 67 銭 5 厘	326 円 76 銭 9 厘 6 毛	2903 円 91 銭 4 厘 5 毛	712 円 53 銭 3 厘	2191 円 38 銭 1 厘 5 毛
1470 円 50 銭	377 円 42 銭 5 厘	3132 円 76 銭 8 厘 8 毛	616 円 99 銭 2 厘 5 毛	2515 円 77 銭 6 厘 3 毛
1750 円 93 銭 7 毛	429 円 70 銭	4965 円 71 銭 7 厘 4 毛	946 円 96 銭 9 厘 3 毛	3983 円 74 銭 8 厘 1 毛
1716 円 38 銭 4 厘 4 毛	632 円 41 銭 9 厘 6 毛	5596 円 89 銭 9 厘 7 毛	1095 円 87 銭 6 厘	4501 円 2 銭 3 厘 7 毛
477 円 56 銭 9 厘		4165 円 72 銭 8 毛	918 円 67 銭	3247 円 50 銭 8 毛
103 円 72 銭 5 厘		5282 円 84 銭 8 厘 7 毛	748 円 39 銭 5 厘	4534 円 45 銭 3 厘 7 毛
297 円 2 厘		6424 円 98 銭 3 厘 3 毛	825 円 49 銭 3 厘 8 毛	5599 円 48 銭 9 厘 5 毛
375 円 39 銭		8091 円 46 銭 7 厘 1 毛	693 円 85 銭 6 厘 5 毛	7397 円 61 銭 6 毛
420 円		9451 円 53 銭 4 厘	1259 円 50 銭 6 厘	8192 円 2 銭 8 厘
420 円		10127 円 77 銭 7 厘 5 毛	1811 円 72 銭 6 厘	8316 円 5 銭 1 厘 5 毛
411 円		6423 円 6 銭 6 厘	868 円 46 銭 9 厘	5556 円 59 銭 7 厘
504 円		6161 円 96 銭 2 厘 5 毛	727 円 92 銭 4 厘	5331 円 52 銭 5 毛
494 円 88 銭 7 厘 4 毛		6345 円 13 銭 9 厘 4 毛	664 円 10 銭 8 厘	5681 円 3 銭 1 厘 4 毛
		4955 円 59 銭 9 厘 4 毛	632 円 26 銭 8 厘	4309 円 83 銭 1 厘 4 毛
		4357 円 26 銭 8 厘 8 毛	275 円 65 銭 7 厘	4081 円 61 銭 1 厘 5 毛
		5359 円 25 銭 6 厘 6 毛	473 円 87 銭 1 厘 5 毛	4885 円 38 銭 5 厘 1 毛
		5832 円 23 銭 1 厘	444 円 79 銭 6 厘	5388 円 43 銭 5 厘
		6465 円 36 銭 1 厘	464 円 6 銭 7 厘	6001 円 29 銭 4 厘
		6584 円 69 銭 1 厘 5 毛	497 円 99 銭 6 厘 5 毛	6086 円 69 銭 5 厘
		7464 円 81 銭 5 厘 3 毛	590 円 27 銭	6874 円 54 銭 5 厘 3 毛
		8342 円 59 銭 7 厘 5 毛	610 円 40 銭 1 厘	7728 円 9 銭 6 厘 5 毛
		9088 円 5 銭 2 厘	717 円 34 銭 1 厘	8370 円 71 銭 1 厘
		10328 円 44 銭	799 円 18 銭 6 厘	9530 円 25 銭 4 厘
		11456 円 41 銭 8 厘	966 円 57 銭 6 厘	10489 円 84 銭 2 厘
		12533 円 26 銭 7 厘	977 円 24 銭	11556 円 2 銭 7 厘
		14582 円 12 銭 3 厘	1096 円 71 銭 1 厘	13484 円 41 銭 2 厘
		15108 円 3 銭 1 厘	1114 円 68 銭 5 厘	13993 円 37 銭 6 厘
		16087 円 15 銭 6 厘	1264 円 96 銭	14822 円 19 銭 6 厘
		17593 円 82 銭 1 厘	1309 円 31 銭 8 厘	16284 円 10 銭 3 厘
		16807 円 70 銭 8 厘		
		17089 円 36 銭 8 厘		
		18048 円 93 銭		
		14982 円 89 銭		
		12835 円 88 銭		
		18136 円 84 銭 2 厘		
		17849 円 21 銭		
		15112 円 90 銭 1 厘		
		18434 円 29 銭 4 厘		
		19713 円 75 銭 8 厘		
		19684 円 22 銭 9 厘	1948 円 84 銭 8 厘	17735 円 48 銭 1 厘
		22630 円 52 銭 6 厘	1801 円 49 銭	20829 円 3 銭 6 厘
		17411 円 46 銭 9 厘	1939 円 19 銭 7 厘	15490 円 57 銭 2 厘
		15125 円 25 銭 3 厘	1803 円 91 銭 6 厘	13321 円 75 銭 7 厘
		12017 円 78 銭 5 厘	1877 円 12 銭 6 厘	10160 円 65 銭 9 厘
		16548 円 73 銭 1 厘	2169 円 96 銭 9 厘	14311 円 90 銭 2 厘
		19662 円 54 銭 5 厘	2744 円 87 銭 7 厘	16317 円 66 銭 8 厘
		32619 円 57 銭 3 厘	4793 円 39 銭	27826 円 18 銭 1 厘
		20302 円 69 銭	5345 円 54 銭 5 厘	14648 円 89 銭 5 厘
		21648 円 94 銭	5930 円 76 銭 5 厘	15718 円 17 銭 5 厘
		12784 円 78 銭 7 厘	6763 円 60 銭	6021 円 18 銭 7 厘

「酒方」は、明治元年には262両余の利益を得ており、同9年には1174円余、同14～16年には5000円前後にまで利益を拡大するが、その後同35年までは2000～3000円で推移する。明治36～38年には再び5000円前後となり、同39～40年は2000円台に落ち込むものの、それ以降は増加する。大正3年には1万8086円余に達し、1万円以上の利益をほぼ獲得しており、高井家の大きな利益源泉となっている。前述したように明治4年には醤油製造を開業し、同15年には清酒醸造と醤油製造とが統合して両造課が設けられている。そのため、明治15年からは「両造課」「両造分」となっている。なお、明治4年には「裏店分」として245両、同5年には「裏店」として813両が記述されているが、これらは醤油製造による利益かもしれない。⁽¹⁴⁾

「荒物方」は、前述した文化4年の「店法」によれば、「明治4年辛未ヨリ開業、一荒物類」とあり、明治4年に開業され、同15年の店法改正では、「雑品課」に変更している。荒物方については、「表店開基」⁽¹⁵⁾によれば、元々明治元年に近江国甲賀郡の小川利左衛門の小店として日野屋利助が「荒物渡世」をするために、高井家の旧店の一部を毎年家賃25両で5年間借りていた。ところが、利助の子息が明治4年に家出をし、利助も老齢のため相続ができないということで、隣家である藤岡店の方で引き受けてもらえないかということになり、そこでこれを藤岡店の荒物方としたようである。その際に、「相談金十ヶ年限預り証文之事」⁽¹⁶⁾として、「代呂物代金」2004両3分・3貫34文、「午年より未四月十三日まで懸貸」893両3分2朱・480文、「質物代々高」431両1分2朱・29文、「未4月十三日改、在金銭」3225両を預かっている。

この表では明治6年に1070円余の利益が計上され、同15年からは雑品課となっている。明治7～9年は1000円未満であるが、その後は1000～3000円の利益をあげている。明治27年には3123円余、同29年には4014円余、同

(14) 表9では便宜的に明治4年と5年の「荒物方」に入れており、「荒物方」の利益額の可能性もある。

(15) 「表店開基」（前掲文政8年正月「高井家記録写（一）」）。

(16) 明治5年正月「相談金十ヶ年限預り証文之事」（前掲文政8年正月「高井家記録写（一）」）。

33 年には 5399 円余、同 41 年には 6928 円もの利益を計上している。明治 43 年以降はしだいに利益額も 2000 ～ 4000 円に減少し、大正 2 年には 77 円余にまで落ち込む。大正 3 ～ 6 年は 1000 円前後に回復し、大正 7 年には 3288 円余となり、同 9 年には 1 万 89 円にまで達する。そして、翌 10 年には 424 円余の欠損を出すものの、同 11 年には 7140 円余、同 12 年には 3180 円余の利益を得ている。したがって、「荒物方」は明治 4 年に開業されて以降、高井家の利益の新たな源泉となっていることがわかる。

次に、明治期に藤岡店の新たな利益を構成することとなる支店の動向を見ておこう。高崎支店は、前述した文化 4 年の「店法」によれば、「群馬県第五大区四小区、上野国群馬郡高崎駅相生町五番地」に所在し、明治 4 年 4 月 17 日に「一清酒醸造、付タリ銘酒」「一醤油造、付タリ味噌」を営業し、明治 7 年 4 月 20 日には荒物方を開業している。また、明治 12 年 1 月の改正店法では、本業として「一醤油造、一酒類請売業、一油類請売業」、同 15 年 1 月の改正店法では、営業項目として「一醤油、味噌製造、付タリ醤油、味噌、塩、酢請売、一酒類請売業、一油類全、付タリ、ローソク、売業請売業」となっている。

高崎支店の創設については、「高崎店開基」⁽¹⁷⁾によれば、同支店は、元々は近江国蒲生郡猫田村の北安兵左衛門と藤崎和兵衛の両家による共同出資の出店であった。高崎の相生町で十一屋庄平という店名前で、酒・醤油等の製造販売をおこなっており、高井家の藤岡店からも「先年来融通仕り来る処」と支援を受けていたが、不如意に陥った。また両家の主人が引き続き亡くなり、店を維持することが困難になった。そこで、高井家にその経営を任せることとなった。任せる期間は 15 年間であり、その間両家に対し、「店表年々損益二不拘、両家相賄金相渡可申候」⁽¹⁸⁾とあり、それぞれ 100 両ずつ賄金を提供するというものであった。この支店は、明治四一年に七世作右衛門の次男である高井商二が譲り受け、醤油製造と酒類販売を営み、大正 11 年の「工場票送致目録」⁽¹⁹⁾によれば、

(17) 「高崎店開基」(前掲文政 8 年正月「高井家記録写(一)」)。

(18) 明治 4 年 4 月「約定為取替一札之事」。

高井商二の高井醸造場として記載されている。⁽²⁰⁾

十一屋庄平店の資産としては、酒 20 石 6 本 (1755 両)、直酒 6 石 (100 両)、酒 2 石 (13 両 2 分)、醤油諸味 1 本 100 石造 (140 両)、味噌 1700 貫目 (309 両)、真木 (40 両)、藩札 (63 両 1 分・290 文)、正銭 (491 貫 60 文) など合計 3194 両 3 分 1 朱・61 文があった。「借用方」の負債としては、藤岡店からの出金分として元金 2720 両と 105 両 2 分・864 文、ほかに借金 795 両 2 分 2 朱・1 貫 270 文の合計 3621 両 2 朱・2 貫 140 文があり、差引 466 両 3 分 1 朱・2 貫 75 文の不足であった。さらに、「酒造方道具」として、三尺 15 本、だき樽 8 本、酒袋 620 枚、船 2 艘など 26 品、「醤油方道具」として、大桶 15 本、三尺 3 本、大釜 1 枚、船 1 艘、溜 8 挺など 12 品と「其の外小道具一切」、「店道具」として、帳場道具 2 通、帳筆筒 2 つ、神棚 1 通、仏壇 1 通、火鉢 5 つ、醤油御鑑札 100 石、みそ御鑑札 1 枚、酒小売同、質札同、表店 1 ケ所 (間口 5 間)、質屋 1 ケ所 (3 × 6 間)、醤油屋 1 ケ所 (12 × 4 間)、味噌小家 1 ケ所、釜屋 1 ケ所などが書上げられている。このようにして、明治 4 年に高崎支店が高井家の藤岡店の支店として設立されたのである。

この表によれば、高崎支店の利益額は、明治 5 年には 443 両余、同 6 年には 397 円余、同 8 年には 1470 円余が見られた。また、明治 9 年には「支店酒方」926 円余と「支店荒物方」824 円余の合計 1750 円余が、同 10 年には 897 円余と 818 円余の合計 1716 円が区別して書かれており、藤岡店に匹敵する利益額を誇っていた。しかし、明治 11 年 3 月 28 日には高崎支店が類焼し、「店、酒蔵、醤油蔵不残焼失、文庫蔵、油入蔵、穀蔵残り申」⁽²¹⁾とあるように、店舗や酒造蔵・醤油蔵が焼失した。したがって、明治 11 年からは「支店」のみで統合され、委任終了の明治 19 年まで記されているが、100 ～ 500 円程度のわずかな利益額に減少している。ほかに、本表では省略したが、明治 5 ～ 10 年に小

✓ (19) 前掲『近江日野町志』巻中、593 頁。

(20) 高崎市史編さん委員会編『新編高崎市史』資料編 10 近代現代Ⅱ (高崎市、1998 年)、414 頁。

泉店の利益額が計上されているが、293 円余～632 円余の少額なものであった。また、明治 23～26 年には「いせ店分」が 30 円余～176 円余の利益を得ている。また、どこの出店か不明であるが、明治 12 年に「出店」として 54 円余が記されている。

そして、これらの利益額を合計したのが「メ」である。その推移を見ておこう。明治元年には、1636 両余であったが、その後順調に利益額を増加する。明治 3～7 年には 2000 円台、同 8 年には 3132 円余、同 10 年には 5596 円余、同 14 年には 8091 円余、同 16 年には 1 万 127 円余にまで達する。明治 17～25 年には 4000～6000 円台でやや低迷するが、その後はまた順調に増加している。明治 27 年には 8342 円余、同 29 年には 1 万 328 円余、同 33 年には 1 万 5108 円余、同 35 年には 1 万 7593 円余に達する。明治 41 年には 1 万 8136 円余となり、大正 3 年には 2 万 2630 円にまで達する。大正 4～8 年にはまた 1 万円台となるが、同 9 年には 3 万 2619 円余となり、同 10～11 年には 2 万円台、同 12 年には 1 万 2784 円余と減少する。

「出メ」は、「内、引」「積金引」「諸方預り借用二付払方」「メ」などとも記され、高井家の借用金の利子や積立金などの損金分を示しているようであるが、内容は不明である。年によって多少変動はあるが、先ほどの「メ」のほぼ 1 割前後

- ✓ (21) 前掲文政 8 年正月「記録之写 (二)」には、「明治十一年寅三月廿八日、高崎駅出火相序で悪風強く、本日午前八時頃住吉町相始り、相生町元町四ツ谷町柳川町、横ハ士族屋敷へ焼移り、戸数凡五百戸余り類焼ニ相成り申候」とある。また、年末詳「十一屋高崎支店類焼報告」によれば、「当店此ノ災ニ罷ル尤モ其ノ所ナリ、表舗一ヶ所、酒造蔵二ヶ所同用不属蔵一ヶ所、醤油蔵一ヶ所同付属蔵一ヶ所、外二庇蔭等右ニ係ル貨物器機一切烏有二歸シ、余ス所僅ニ土蔵三ヶ所而已、則焼失ノ価額ヲ計算スルニ金五千四百八十八円余ヲ失フ、而テ建築物器械ノ如キハ因リ此ノ外トス、初メ失火ノ急変ヲ知ルヤ、速カ二人數ヲ配布シテ防禦ニ当ラセシム、然レ共終ニ救フベカラザルヲ知り、表舗ヲ棄テテ緒飛ヲ防ガント要ス、遇々北ノ隅細野某ノ裏ノ物置ヘ延焼シ、酒蔵ト醤油蔵トノ間ニアル醤油造リ付属ノ板屋ヘ炎花ヲ飛ス、雨の如シ衆望見テ咄嗟消防ニ従事ス、板屋瓦屋ニ異ナリ忽掠城スレバ忽チ燃エ屋上尚為スベキモ屋下ノミニ一円ノ火ナリ、衆堪ユベカラズ棄テ後面ノ耕地ニ逸スヤ否忽チ炎上ス、酒蔵マタ支エズ共ニ焼土ナリ、二番蔵穀蔵ノ如キ火ノミニニ侵入ス、店人コレヲ防グ、尤モ非常尽カヲ極ム、因テ僅ニ免ルハヲ得タリト言爾」とあり、類焼の様様を伝えている。

の金額となっている。

「差引」は、基本的には前述の「ズ」から「出ズ」を差し引いた利益額が計上されており、明治2年には1648両余、同3～8年は2000両(円)台、同9～13年は3000～5000円台、同14～16年は8000円前後と増加する。明治17～23年は5000円前後に減少するが、それ以降は着実に増加し、同35年には1万6284円余にまで達する。大正3年には2万829円余となるが、同4年以降は同9年の2万7826円余を除けば1万5000円前後となり、同12年には6021円余にまで落ち込んでいる。「差引」は、「ズ」に連動して、ほぼ同様の傾向を示す。

要するに、明治元年以降の高井家の藤岡店の利益動向を見ると、明治初年には江戸期と同様に2000両(円)前後の利益を毎年あげ、明治10年代から25年にかけては5000円前後、明治16年には1万円を超える利益をあげていた。さらに、明治29年以降になると常に1万円を超える利益となり、同45年には2万円近くの利益を得るようになる。大正期に入ると、同3年には2万円を超すが、1万円台の年も見られるものの、大正9～11年には2～3万円の利益を得て、順調に利益の拡大が進展していったようすがうかがえる。

これを利益構成から見ると、明治初年にはまだ江戸期と同様に「証文」「質方」「酒方」の3つの源泉が健在であったが、明治5年以降はこのうちそれまで大きな利益の源泉であった「証文」が激減した。明治10年には「証文」の項目がなくなるように、貸付からの利益が消滅し、明治4年からは「荒物方」が新たに登場し、この部門が「雑品課」となり、「証文」に代わって利益構成の中核部を担うようになる。「酒方」は、明治4年から醤油製造も行うようになり、「両造課」として「雑品課」とともに江戸期よりも大きな利益構成のウエイトをもつようになる。このようにして「雑品課」と「両造課」の両部門は、藤岡店の両輪としての活躍を見せる。「質方」は、明治5年以降江戸期のような勢いはなく、明治15年に「典物課」となったものの、500円前後の利益しか維持できなかった。そして、明治27～36年には1000円を超え、4000円に達する年

も見られたが、明治 37 年以降は 500 円に満たない年も続き、大正 6 年にはついに廃業となった。

このように、明治以降になると高井家は貸付や質方からよりも、醤油製造を含んだ「酒方」と明治 5 年から新たに始めた「荒物方」の両部門の発展を軸に事業経営がなされていたことがわかる。

4 資産動向

ここでは、明治 40 年代と少し時期的に偏るが、高井家の事業展開、資産状況を全体的に見ておくことにしよう。まず、3 課（典物課、両造課、雑品課）の商況⁽²²⁾を見てみよう。明治 40 年の「三課商況報告簿」によれば、例えば明治 40 年 6 月の月次報告では、典物課は繰越高 4675 円 55 銭、入質 1783 円 20 銭、出質 1034 円 30 銭、抵当貸 615 円、同請戻 940 円、現在高 5099 円 45 銭、流売上 44 円 25 銭、利子上り 91 円 23 銭 5 厘、三益売上 390 円 58 銭 5 厘であった。両造課は、繰越高が自製酒 2 万 87 円 73 銭 7 厘、買入酒 4012 円 79 銭 7 厘、醤油・味噌 9203 円 72 銭 9 厘、売上高が自製酒 4226 円 25 銭 5 厘、買入酒 1539 円 22 銭 5 厘、醤油・味噌 1563 円 23 銭 5 厘、取上高が自製酒 3871 円 63 銭 7 厘、買入酒 947 円 47 銭 2 厘、醤油・味噌 923 円 61 銭、差引貸が自製酒 2 万 442 円 35 銭 5 厘、買入酒 4604 円 55 銭、醤油・味噌 9843 円 35 銭 4 厘であった。雑品課は、繰越高 3 万 1860 円 29 銭 5 厘、帳付売貸 9225 円 12 銭 1 厘、現金売 2607 円 91 銭 8 厘、取上卸 8855 円 51 銭 2 厘、同小売 1493 円 86 銭 2 厘、差引貸 3 万 3343 円 96 銭（前月より 1483 円 66 銭 5 厘増加）であった。

明治 44 年の「三課営業報告簿」⁽²³⁾によれば、同様に例えば明治 44 年 4 月には、

(22) 明治 40 年「三課商況報告簿」。この史料は、表紙に「高井本店」とあり、3 課の明治 40 年 6 月から明治 43 年 12 月までの毎月の報告数値が記載されている。雑品課に数値には、「ア」、「カ」、「サ」、「タ」などの文字が千以上の単位に記載されているが、符牒と判断して、「ア」は 1 万、「カ」は 2 万、「サ」は 3 万、「タ」は 4 万とした。

(23) 明治 44 年「三課営業報告簿」。この史料も、前掲明治 40 年「三課商況報告簿」と同様の内容となっており、明治 44 年 1 月から大正 3 年 10 月までと記されている。

典物課は繰越高 2397 円 95 銭，入質 474 円 30 銭，出質 274 円 20 銭，抵当貸 255 円，同請戻 210 円，現在高 2643 円 5 銭，利子上り 37 円 93 銭 1 厘，三益売上 317 円 59 銭 5 厘であった。両造課は，繰越高が酒類 3 万 2382 円 23 銭 4 厘，醤油・味噌 1 万 7169 円 93 銭，売上高が酒類 8165 円 44 銭 5 厘，醤油・味噌 2047 円 22 銭 5 厘，取上高が酒類 6977 円 92 銭 6 厘，醤油・味噌 2376 円 27 銭，差引貸が酒類 3 万 3569 円 75 銭 3 厘，醤油・味噌 1 万 6840 円 88 銭 5 厘であった。荒物方は，繰越高 2 万 9442 円 30 銭 3 厘，貸売高 1 万 2788 円 49 銭 8 厘，現金売高 1564 円 34 銭 5 厘，取上卸 1 万 911 円 53 銭，同小売 1029 円 74 銭 5 厘，差引貸 3 万 1853 円 87 銭 1 厘（前月比較 2411 円 56 銭 8 厘）であった。

このように 3 課を比較すると，営業規模からしても典物課が最も小さく，4 年の間にも規模をさらに縮小させており，大正 6 年に廃業となることがうなずける。一方，両造課と雑品課はともに 3 万円規模の事業を営んでおり，前述した表 9 と同様に高井家の藤岡店の両輪として活躍しているのが確認できる。また，両造課では，酒造が醤油・味噌の倍以上の規模をもち，酒造においても醸造だけでなく，買入も行っていたことがわかる。

次に，藤岡店の資産状況を見てみよう。明治 43 年 10 月の「資産調査原簿」⁽²⁴⁾によれば，まず不動産があげられる。すなわち，「郡村宅地」として藤岡町大字藤岡の 5 筆の宅地 2 反 3 畝 2 歩 7 合（価格 1859 円 44 銭），「畑」として藤岡町の大字藤岡および大字小林の 6 筆の畑 3 反 3 畝 14 歩（価格 173 円 70 銭），「山林」として藤岡町大字藤岡の 15 筆の山林 9 町 9 反 5 歩（価格 1485 円 25 銭）があった。建物としては，坪数 1166 坪 4 合 9 勺（価格 1 万 8028 円 35 銭）の建物があり，そこには木造瓦葺土蔵をはじめ，室屋，釜屋場，醤油蔵，味噌蔵，塩置場，薪置場や 9 番まで番号を付した蔵など 30 近くの大小さまざまな土蔵・平家・水屋などの建物が並ぶ作業場を中心とした建物群があった。また，「貸家」としての建物も坪数 107 坪 3 合 6 勺（価格 337 円 30 銭 5 厘）とあり，そこには木造板葺

(24) 明治 43 年 10 月「資産調査原簿」。この史料の表紙には，「高井本店」と書かれており，藤岡店の資産簿と思われる。

2階家をはじめ、納屋なども含め13軒の建物を所有していた。

「清酒、醤油醸造器具機械」(3425円)には、「酒造用器具機械」として、六尺桶(5年以上のものも含めて)76本、六尺細桶17本、三尺桶36本、圧搾器2台、甕3個、釜3個などの39品の酒造道具があり、「醤油製造用器具機械」として、六尺桶53本、六尺細桶6本、三尺桶11本、圧搾器3台、釜3個、煎釜1台、麴板750枚、甕1台など23品の道具類があった。

「国債証書」は2万3200円、「日本勸業銀行債券」は3500円、「藤岡銀行株式」23株は989円、「質屋及貸金」は3万5717円95銭であり、この内「有質」は2327円95銭であった。「預金」は2万1193円96銭、「有金」は1390円62銭であった。

「商品」は3万9166円85銭4厘であり、この内清酒は2万581円18銭4厘(643石1斗6升2合)、買酒下りは427円(12駄半)、焼酎は209円(3石8斗)、直酎は72円80銭(1石4斗)、味淋は198円85銭(3石2斗)、醤油は1203円70銭(98石5斗2升)、味噌は483円40銭(2417貫目)、酢は55円20銭(8駄)、度量衡器は1171円94銭9厘、塩は1686円12銭(1406俵)、砂糖は1373円3銭3厘(189個)、雑貨は1万1704円61銭8厘であった。「醤油査定済諸味」は572円52銭(68石3斗5升6合)、「同半製品」は5841円59銭3厘、「味噌半製品」は2898円72銭、「原料大豆」は694円93銭(66石3斗)、「同小麦」は2573円40銭2厘(294石)、「同竹材」は978円37銭1厘(119石3斗5升)、「同塩」は375円90銭(60石)、「懸売代金」は2万4660円86銭4厘であり、合計が18万9063円68銭9厘であった。

これから、「酒造税 三四期分」1万1197円14銭、「醤油税 五月一日ヨリ十月末日迄査定分」815円37銭、「営業税、国税後半季分」430円48銭、「同附加 県税」53円3銭、「同町税」64円57銭の税金分合計1万2560円59銭と「商品代金未払分」1万6896円62銭1厘の合計2万9457円21銭1厘を「相除金」として差し引いて、15万9606円95銭2厘が藤岡店の正味資産として計算されている。

おわりに

以上、高井作右衛門家の経営について述べてきたが、そこでは次のようなことが明らかになった。

第1に、高井作右衛門家は、近江国蒲生郡松尾山村に本拠地をもち、享保期に近江国から出て、関東で麻布などの行商を始め、享保14年に酒造業を開始した。元文元年には上野国緑野郡藤岡に店舗を設け、本格的な事業展開を進め、同4年には質屋も開業するようになり、関東での経営基盤を作りあげた。その後、歴代の当主は事業拡大に努め、慶応元年には伊勢国津の余慶町に出店を設けて酒造業を営み、同4年には醤油醸造業を兼業し、明治元年には津の入江町に支店を置いた。さらに、明治4年には上野国高崎町に支店を開設し、醤油醸造と酒類販売業を始め、業務の拡大をはかった。藤岡店においては、明治4年に荒物方が開業され、同15年には清酒醸造と醤油味噌製造とが両造課、荒物方が雑品課、質方が典物課となる3課体制が確立したが、大正6年には典物課が廃止された。

第2に、雇用については、元文4年にはすでに近江出身者の雇用が確認され、文化4年には「身分定事」という店則も見られ、質素儉約、遊芸などの禁止、規則正しい生活、忠誠心などを定めていた。明治期になると、酒造労働者の状況がわかり、越後出身の20人近くになる杜氏集団の存在が明らかになった。それ以外にも、醤油製造のための労働者として、千葉県などからの雇用も確認された。明治期から昭和にかけても在所登り制度が存在し、明治10年には13歳での初下り、5年後の初登り（60日の休暇）、3年後の2度登り（同）、2年後の3度登り（同）、31歳以上は毎年帰国（70日の休暇、41歳以上は90日）であったが、登りまでの期間が短縮され、毎年帰国や年に2回帰国というように登り制度がしだいに休暇制度に緩められていった。また、給金も初登りまで給金が支払われていなかったが、大正10年からは初出勤の2年目から給金が支給されるようになった。

第3に、高井家藤岡店の利益構成からすると、江戸期の終わりにおける利益の源泉は、酒造業、質屋業、貸付業であったが、その主要な利益の源泉は、家業とされる酒造業や質屋業ではなく貸付業にあった。貸付は、高崎藩をはじめとする領主はもちろん、酒造業者を含む商人への貸付や周辺の領民などへ多くの資金が貸し付けられており、領主からはその貢献に対し町年寄格や苗字が許された。酒造業は利益額の変動も大きく、むしろ質屋業の方がその倍以上の利益をあげ安定していた。しかし、酒造業も利益額が相対的に低かったとはいえ、藤岡周辺の酒造業者の中では800石という上位の造高をもち酒造仲間の行司を務めるなど継続して着実な発展を図り、それが近代以降の高井家の発展にもつながっていったようである。

明治初年には、まだ江戸期と同様に貸付業、質屋業、酒造業の3つの利益源泉が健在であったが、明治5年以降はこのうちそれまで大きな利益の源泉であった貸付業が激減した。明治10年には貸付からの利益が消滅し、明治4年からは「荒物方」が新たに登場し、この部門が「雑品課」となり、貸付に代わって利益構成の中枢部を担うようになる。「酒方」は、明治4年から醤油製造も行うようになり、「両造課」として「雑品課」とともに江戸期よりも大きな利益構成のウエイトを持つようになっていった。このようにして「雑品課」と「両造課」の両部門は、藤岡店の両輪としての活躍を見せる。「質方」は、明治5年以降江戸期のような勢いはなくなり、明治15年に「典物課」となったものの、しだいに以前のような状態は見られなくなり、大正6年にはついに廃業となった。

第4に、高井家藤岡店の資産としては、明治43年には藤岡町に5筆の宅地、6筆の畑、15筆の山林を有し、1166坪余の建物には、木造瓦葺土蔵をはじめ、室屋、釜屋場、醤油蔵、味噌蔵、塩置場、薪置場や蔵など30近くの大きささまざまな建物が並ぶ作業場を中核とした建物群があり、そこには清酒・醤油醸造用器具機械が備えられていた。また、木造板葺2階家などがならぶ107坪余の貸家も所有していた。「国債証書」などの有価証券は2万7689円、「質屋及貸

金」は3万5717円余,「預金」は2万1193円余,「有金」は1390円余,「商品」は清酒・醤油・味噌・塩など3万9166円余であった。これらを合計すると18万9063円68銭9厘となり,これから酒造税などの税金分1万2560円余と「商品代金未払分」1万6896円余の合計2万9457円余を差し引き,15万9606円余が藤岡店の正味資産として計算されていた。

第5に,高井家の出店としては,高崎支店と津店があった。高崎支店は,元々は近江国蒲生郡猫田村の北安兵左衛門と藤崎和兵衛の両家による共同出資の出店であったものを高井家がこの事業を引き受けて支店としたものである。明治4年4月に清酒醸造と醤油製造の店として相生町に開業し,同7年4月には荒物類をも開業している。明治8～10年頃には藤岡店に匹敵する利益額を誇っていたが,同11年3月に類焼し,店舗や酒造蔵・醤油蔵が焼失した。そのため,明治12年1月には醤油・味噌は製造していたものの,酒類・油類などの請売業務に重点がおかれ,利益額もわずかなものになっていった。

津店は,慶応元年5月に津藩の藩主藤堂家から余慶町の酒造蔵を1000両で譲り受け,内部を改装して同年11月から酒造業を始め,同4年2月には醤油製造も行うようになった。津店は,明治元年に入江町支店を開設し,同2年には醤油醸造も開始した。さらに,明治19年には津の常盤町支店を設け,3店となった。明治4年の清酒造石高は500石であったが,同27年には1586石余となり,醤油の醸造高も明治4年には55石であったが,同27年には846石余になった。明治38年1月の津店の従業員は,津の本店に10人,常盤町支店には8人,入江町支店に4人の合計22人の店員がおり,他に酒造杜氏・蔵人18人,醤油杜氏・蔵人11人,「精米方及炊事場」に5人の従業員がいて,合計56人の人員が在籍していた。店員の原籍は,蒲生郡15人,甲賀郡7人であり,すべて近江出身者であった。酒造杜氏は愛知県知多郡の出身で,醤油杜氏は津市の出身であった。

〔付記〕

本稿作成にあたっては、史料所蔵者である高井作右衛門家ならびに日野町史編さん室には、大変お世話になった。ここに深く感謝するしだいである。なお本稿は、平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「近江商人の経営と雇用形態に関する研究」による研究成果の一部である。